

---

# 夏の卒業式

佳生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏の卒業式

### 【Nコード】

N8126E

### 【作者名】

佳生

### 【あらすじ】

夏の卒業式。タイムカプセルに未来を託した子ども達と、託せず  
に大人になった僕の物語。

## いち

別に、授業中に眠ってしまう事に抵抗はなかった。だから、教室で目が覚める事にも驚きはしない。

「崎速くん……起きないと」

「あ……はい。うん……分かった」

僕を起こしてくれたのは、隣の席の女の子。名前は確か、杉表<sup>すぎおもて</sup>幸ちゃん<sup>ゆき</sup>。長い髪を両肩から前に持ってきていて、ゆるく三つ網にして下げている。優しそうな表情で微笑んでいる彼女に返事をして、僕はゆっくりと体を起こす。

一瞬視界が霞んだから、僕は寝ぼけ眼をこする。皆黒板の方を向いて、クラスのリーダーの島垣<sup>とうがき</sup>善樹<sup>よしき</sup>の進行のもと、何かを話し合っている。黒板の端の方に、大きく、小学生にしては上手い字で、こうか書いてあった。

『卒業に向けて』

そんな時期になったのかと思った僕だけでも、窓の外を見ると、木の緑がとても鮮やかで、同じくらいに空の青は綺麗だった。そして、暑い。今は夏だ。卒業に向けて話し合うには、まだまだ早い。そう思っているのは僕だけなのか。

「崎速！ 崎速<sup>さきはや</sup> 歩！<sup>あゆむ</sup> なんかない？」

「別に……特に何も無いけど」

寝起きで頭も回らない僕は、それだけを告げて、また進んでいく会議を眺める。卒業式に向けて、一体何をしようというのだろうか。今から決めたって、時間を余してしまうだけのよう思う。けど、そんなことはなかった。

「卒業式は明後日だからな！ 皆、気合い入れていくぞ！」

は？ と、そう思ったのはやっぱり僕だけ。

善樹の言葉に天井に手を突き出して盛り上がったクラスメイト達はそれぞれに教室から外へと散っていった。

結局僕は、会議で何が決まったのか分からず仕舞いのまま、善樹に手をひかれて教室から出た。

取りあえず、何をすればいいのだろうと悩んでいたら、何の意味はあるのか分からないけれども、校庭の木の根元を掘り返している善樹に、黄色のスコップを渡された。

僕も、一緒に掘ればいいのだろうか。

「タイムカプセル埋めるのは、定番だよな！」

「そうなの？」

「おう、俺の姉貴も兄貴も……父さんもやっただって言った。何年かした後掘り起こすんだってよ」

「そうなの」

ザックザックと、木の陰の下、汗を流しながら掘り続ける僕と善樹。ほどなくして、地味な作業にあき始めた僕は、堪らず善樹に尋ねた。

「いつまで掘るの？」

「いつまでって……そりゃあ」

と、一呼吸間隔を置いた善樹は、口だけを歪ませるようにして笑う。

「人一人、入るくらいは掘るだろう？ 普通さ」

その言葉に絶句する僕を置いて、善樹はまた、ザクザクと地面を掘りだす。人一人埋まるまでの穴を、このスコップで掘るのは無理だろうと思いつながら、僕は内心うろたえながら地面を掘り続ける。夏の卒業式。それが一体何からの卒業式なのか、あの頃の僕には全く分からなかった。

「先生って、ここの学校卒業したんですよね！」

「まあ。といつても、その頃は小学校しかなかったから……」

一つの敷地に、小中高と、三つ学校を有する、私立奈津乃学園。  
そこに今年新任教師としてやってきた男、崎速 歩は資料室で数人の生徒と談笑していた。文系教科担当の彼は、よくこの資料室で休憩している。それを知っている生徒が集まってきて、狭い資料室は、窓を開けてもなかなか涼しくなってくれない。

「十年くらい前の話だよ」

笑う歩に、男子生徒の一人が指を折って、閃いたかのように笑う。

「じゃあ、先生、今、二十一くらいか！」

俺達と五・六歳しか変わらないんだぜ、とはしゃいでいるのは、高校二年二組の狛人こまひと 夕威ゆづいだ。

自分で切っているという髪は、中途半端な長さで適當さが伺える。明るい性格で輕薄に見えるのだが、想像よりもリーダーシップ性に富んでいる。自分でそれを出さないだけで。

と、会話を聞いていたもう一人が顔を上げて、窓の外を見ながらつぶやいた。

「二十一か……俺の兄さんと一緒だ」

「お兄さん？ えっと……」

その少年は二年であるけれど、教えに行くクラスからは外れているので、歩は直ぐに名前を思い出すことができなかった。

ワイシャツの襟をバサバサとさせながら言った少年の言葉に、歩はああ、とうなずく事になる。心の底では、死にそうなほどに驚きながら。

「島垣。俺は島垣とうがき 善哉よしや。兄さんは善樹……知ってます？」

「ああ、知ってる。同じクラスだったよ。一緒に穴を掘った……」

そう答えながら、歩は自分の想像が現実にならなかったことに感謝した。

もし善哉が最後に、『知ってます？』ではなく『知ってますよね？』

と聞いてきたらば、間違いなく恐怖を表情に出してしまっただろう。

「穴？ あ、タイムカプセル埋めたってやつですよ」

「そう」

「へえ、タイムカプセル。いいな！ 俺らもやろうぜ！」

校庭の並木を見ながら、どこに埋めようかと考えている夕威はふと表情を曇らせた。

「でも、よくテレビとかでやってるよな……どこに埋めたか分かんないってやつ」

「うん。残念な結果だね」

「……何が残念な結果なわけ？」

宝探しの宝が見つけれなかった当人達のような表情で会話をしていた夕威と善哉に、奥の方から分厚い本を抱えた少女が加わる。先ほども、今日の社会科で出された宿題についてを調べていたのだ。

セミロングの髪を今はピンで上げている。

その彼女に、夕威が窓枠に座って言う。

「いいなあ、スカート。涼しそう」

「あら、穿いてみる？ 夕威ならきつと似合うわよ？」

「似合うんなら穿いてもいいかな」

テーブルの上に本を置いて椅子に腰かけた彼女は、大きく伸びをする。夕威と同じく二組の生徒で、名前は馬屋技まやぎ 裕子ゆうこ。

この三人は幼馴染で、毎日のようにこの資料室に顔を出す。というより、入学当初からこの資料室に入り浸り、それがきっかけで歩

と彼らは仲良くなった。

成績優秀な裕子と善哉。そして常に当たり障りない成績を通して  
いる夕威。この三人は面白くて仕方がない。これほど和気あいあい  
としているのに、三人が三人とも高校からの付き合いだという。そ  
れも、きっかけはこの資料室。

「あ、なんか言われたら似合う気がしてきた。まじで」

「穿く？」

「……おまえ、それはやめとけって」

風の通るそこで小さく笑う夕威に、善哉が半眼になって止める。  
ノートにペンを走らせながら言う裕子は、視線を上げすらしていな  
い。その光景を眺めながら、歩はほほえましく思う。

きっと、自分達もこうなっていたのだろうという、余りにも儚い想  
像をしながら。



に

卒業式は、真っ赤な色がよく似合う。

赤い色。その赤が余りにも鮮やかで、歩はしゃがみこんで口を手で押さえ、息を殺していた。そうしないと、自分も赤くなってしまう。幸ちゃんは、すでに赤く着飾って、かくれんぼをしている。

順番に赤く着飾っていくクラスメイト。僕も赤くならないといけないんだろうか。赤は好きじゃない。

呼吸もまともにできない僕の目の前で、遂に善樹も赤色を身につけた。

ぱつと散って、ばたばたと。綺麗だなんて思わない。

こんな卒業式は嫌だ。こんな卒業式なら、僕は卒業したくない。

どうしてこんな事になっているんだろう。どうして？ どうして僕だけ違うんだ。僕が遅刻してきたから？ その遅刻だって、僕のせいじゃないのに。どうして、僕だけ。

僕だけ、残されるんだろう。

……僕は、僕はどうしたらいいんだ。赤に染まらない僕は……仲間外れになって、そこから逃げた。

本日は珍しく、あの三人組はやってこなかった。理由は知っているから心配にはならないが、やはりいないと寂しいものだ。熱い風の吹き込む部屋で、引っぱりだしてきた書物を眺める歩は、視界を埋め尽くす活字に意識を飛ばす。余計なことは考えない。

思い出してはいけないことを、思い出してしまうから。

この季節は特にそうだ。あの日のことを思い出す。置いて行かれた日のことを思い出す。卒業できなかった自分を、心の隅で喜ぶ。みんなは卒業したのに。夏の、あの日に。

「……今日は風が強いな」

油断したすきに、一気にページがめくれていった本をいったん閉じて、歩は窓を閉めようと、窓際まで歩いてゆく。そして、手を止めた。

とある木の下に、小さな影を見つけたから。

少しツンツンした髪。つり気味の目。

一瞬、善樹だと思ってしまい、歩は眼を見開き、そして息を止めた。

しかし、そんなことがあるはずはない。木の下にいたのは、善哉の方だ。兄ではなくて、弟。

「……」

じつとその木の根元を見つめ、ぼんやりと立っている姿を、なぜか歩もぼんやりと眺めていた。善哉がそこで何を始めるのかなどとは考えずに、ひたすらぼんやりとしていた。焦点は、善哉ではなく、木の根元全体に向いていた。

タイムカプセル

善樹と一緒に、穴を掘った木。忘れられない、幸ちゃんがかくれんぼをしていた木。

「おりよ？ センセ、何見てんの？」

その声にハツとして振り向くと、立っていたのは夕威だった。腕まくりをして、ズボンを膝あたりまでめくり上げてしまっている。彼はきよんととして、歩と並ぶようにして窓から外を見る。そして同じように善哉を見つけて、声を張り上げた。

「あぁっ！ いっけねえんだ！ お前、ちゃんと仕事しろよ！！」

「してんだろ！ 俺のどこみて仕事してないって言うんだよ！」

「ただ立ってるだけの仕事があるかぁぁっ！」

確かに夕威の言うとおりだった。

今日は明日に控えた高校行事“花火大会”の準備で、各クラス張り切って仕事に取り組んでいる…はずの時間だ。

善哉にしろ夕威にしろ、クラスの仕事をさぼっているということ。ここから確認できる時点で、明確なので、歩はあえてどちらにも何も言わなかった。やはり真面目に作業しているのは裕子だけなんだろうか。

「はぁ、疲れたぁ。センセはなんか担当してないんすか？ ポスタ―編集とか」

「ああ、僕は何も」

「ふうん。なんか意外」

善哉に文句を言いながら、すっかり窓辺に腰を落ち着けてしまった夕威は、半眼になりながら歩を見る。真面目で少し気弱そうな教師として有名な彼だけに、こんな時に限って面倒な仕事を押し付けられていそつだ。

けれども実際にそんなことはなく、彼だけ蚊帳の外のようで、夕

威はどことなくいい気がしなかった。一層のこと、巻き込んでやるうかとも思ったが、なぜかそれも気がひけた。彼の疲れたような雰囲気。どうしたのだろうか。

「センセってさ、実は結構人と関わるって苦手だったりする？」

いきなり問われた一言に、歩は軽く面喰いながらも答えを探す。探しながらも、心はどこか別の何かを思っている。

「別に…意識するほど苦手じゃないよ。でも、人よりは敏感な方かな」

仲間に入れておいて、仲間外れにするなら、最初から放っておいてくれればいいのに。

ふとそう思った。別段、仲間外れにされている訳ではない。教師同士の付き合いも、生徒との付き合いも良好だ。ただ、歩には同い年の友人と呼べる人間がいない。

幼馴染という存在がない。

年上か、年下。彼にはその層の友人しかないのだ。ともすれば、友人と呼べるかどうかあやしい。

「そっか……じゃあ、センセって、本気になったりしたことある？」  
「は？」

いきなりの質問に振り向くと、夕威はグイッと歩のネクタイをつかみ上げた。ネクタイピンが外れて、床に転がった音が響く。これにはさすがの歩も驚いたが、しかし振り払うことも、突き飛ばすこともない。

ただ受け身でいるだけだ。じっとして動かない。

「センサーさ、本気になったことないっしょ？　いつつもどつかに飛んでる」

「そう」

「ボーっとしててさ。やる事も言う事も正しいのに、なんか薄いんだよね」

「そう」

「それってさ、生きてる意味あるの？」

「さあ」

思っていた。生きている意味などないのだと。けれどもここにいる以上、生きるしかないじゃないか。

人は、そう簡単に死ねないのだから。

さん

「何の図よ、これ」

タイミングが良いのか悪いのか。夕威にネクタイをつかまれ、ぼんやりとされるがままになっていた歩に問うように、裕子が呆れたような表情で戸口に立っていた。彼女もさばりに来たんだろうか。

ことの発端を話すと、夕威が大変な目に合いそうな予感がするの  
で、あえてごまかしていったが、それにしたって説明は難しい。手  
が滑って…という苦しい言い訳しか出てこなかった。

「まあ、そういう事しておくけど……」

こういう事にしておける彼女の精神は強靱だった。

何事もなかったように本棚の奥に消える裕子。歩が何となく視線  
を向けると、苦笑した夕威と目が合う。思わず顔を見合わせた二人  
は、何となく笑って、それから何事もなく窓の外へ視線をうつした。  
さすがに善哉の姿はない。

「何見てんの。あれ、あの木？」

いつの間に戻ってきたのか。抱えるように本を持った裕子が、歩  
と夕威の間から顔を出して、二人の見ていた木をさす。

「あの木のどこ、女の子の幽霊が出るって」

「え？」

事もなげに言われた言葉に、歩の表情が固まる。

少女の幽霊。そう言われて浮かぶのは、記憶の彼方にある女の子。

幸ちゃん。

「結構有名だよ。七不思議みたいになってるの。先生知らない？」

「……僕は、知らなかったな。そうなんだ」

「へえ。センセが知らないって事は、最近出てきた噂なんだね。調べれば出てくるかも…噂の原因」

窓の縁の狭い場所に座っている夕威は、何の危なげもなく体育座りの様な体制を取って、面白そうに笑う。

ここでひと押しすれば、彼はいとも簡単に落ちるだろう。三階から、土の地面へ。

「……」

す、と立ちあがった歩は、手を夕威へと伸ばす。その手が肩に触れ、思った通りに夕威の体は斜めになった。外側へ。

「わっ!？」

「危ない！」

しかし、彼が地面に衝突することはなかった。歩に肩をつかまれ、一気に室内に引き戻される。夕威が顔をあげると、たぶん今の自分と同じ表情をしているであろう裕子と目が合った。だから、とりあえずひきつった笑みを浮かべてみる。

「……はは、セーフ」

「せ、セーフじゃないわよ、馬鹿！」

「うっ……痛え！」

ぱちん、という音が響いた。真上から真下へ。裕子の掌が夕威の

頭を叩いたのだ。止めるに止められなかった歩は、両手をさ迷わせながら苦笑するしかない。

「結局全員サボってんじゃない」

丁度そこへ入ってきたのは善哉だ。授業はまだ終了していない。相変わらず暑そうにしている彼は、定位置の椅子に腰かけて、大きく息をつく。それから、裕子と夕威を指差して、それから力なくその手を下げた。

「なんか文句、言いたかったけどいいや」

それすらも疲れたというように机に突っ伏した彼に、夕威が向かい側に座りながら声をかける。

「おいー、どうしたんだよ。そんな疲れることあったっけ？」

「お前にはなかったな」

それはそうだ。クラスの手伝いもせずに、早々とここまで逃げた夕威には、疲れる要素など一つもない。裕子にしても、それほどまでに疲れることもないだろう。

ここに来るまでの間に、運悪くクラスメイトに仕事を頼まれてしまったのだろう。明日の花火大会に、一番興味のなさそうな彼が、一番苦勞をしている。なんともおかしいことだった。

さわさわと木がなって、漸くこの部屋にも風が入ってきた。涼しそうに目を細める裕子と、窓辺に走って行って大きく手を広げて風を受け止める夕威。そして机で本格的に眠ろうとしている善哉。

胸の辺りが重い。この三人がとても羨ましく思え、歩が視線を落としたときだった。



「先生、歩先生、時間ですよ？……あら、貴方達、こんなところで何してるの？ クラスのお仕事は？」

「あ、おばあちゃんセンセ」

軽く資料室の扉をノックしてから入ってきたのは、かなり年配の保健室の先生だった。本名は杉本しの《すぎもと》。『おばあちゃん先生』の愛称で親しまれている彼女は、誰に対しても優しく、包容力のある人で、歩が小学生の時だった頃からこの学園に居た。彼女いわく、学園の皆がやめさせてくれないそうだ。

彼女の声に時計を見た歩が、ああそうですね、と立ち上がり、杉本に頭を下げて資料室から出てゆく。キョトンとしている三人の生徒に、彼女は、早く教室に戻りなさいね、とだけ言って保健室に帰って行った。

「センセ、どこ行くんだった？」

「さあ」

呟いた夕威と、それに返した裕子。善哉は我関せずの様子で、机に突っ伏して風に当たっている。

歩の居なくなっただけ資料室はただただ涼しくて、何となく空いてしまった空間がさびしいように思えた。それからチャイムが鳴るまで、三人は適当に資料室を物色してから、教室に帰って行った。

車を適当に駐車場に止めた歩は、そこで一息置いてから車のドアを開ける。手には仕事道具の詰まったカバンと、かさかさと音を立てる白い袋。中には自分の名前と薬局名、そして服用する時間が印刷された、白い紙袋が入っている。

自分が思うよりも体の造りが弱かったらしく、ほんの少しのプレッシャーにも、耐えることは出来なかったようだ。元から弱いのだから、と杉本には言われてしまったが。

部屋の鍵を取りだし、ロックにさし込もうとした時だ。気配を感じてそちらを向いた瞬間、歩は鍵から手を放し、持っていたものを全部落とした。

そしてとつさに頭に浮かんだ言葉を、口にした。

「ごめん…」

酷く震えた声だった。許してくれる訳はなく、謝ることも出来ないと思っていた。だが、彼は笑った。

「何がごめんだ。なんもしてねえだろうが、歩」

忘れる訳はない。髪は伸びたし、雰囲気だって変わった。けども、面影がある。

「何もしなかったから…ごめん、善樹」

「お前、昔より暗くなったんじゃねえ？ お前のせいじゃねえよ。  
分かってるさ、皆……多分、な」

そう、自分を励ますような善樹に、懐かしさを感じながら、歩は  
ようやく表情を緩めた。

よん

あまり色のない部屋だった。物珍しげに部屋を見回している善樹に、缶酎ハイを放った歩だったが、善樹は受けとれずに落としたらしい。

つまむ物を探していた歩は、その瞬間をみれなかったが。

「いきなり投げるなよ！」

「ごめん」

笑いを含んだ声音に同じ様に返して、歩は卓に着く。受取りそこねた缶酎ハイは、少し凹んだようだったが、吹き出したりすることなく開けられたようだった。

「昔はジュースだったのになー。大人になったぜ、俺達！」

「無駄に年だけとった気がする」

「お前なあ……」

一口、酎ハイを飲んだ歩に、善樹は何とも言えない笑みで溜め息をついた。

「元気そうで良かった良かった」

そういう善樹も、と言おうとして、ふと歩は思った。善樹はどうしてここを知ってるのだろうと。

誰かに、ましてや久しぶりに再会した善樹に、家の住所を教えたつもりはない。

「弟がさ。お前が先生やってるつつつてたから。それで、へー、と

か思ってたたら、病院で見掛けてさ」

「病院？ 善樹、どこが悪いのか」

「あ？ いや、何て言おう。大した事じゃないんだけどな。良くいるんだよ、病院」

「……そうか」

と、くら、と脳が揺れるような感覚を覚えた。まさか一口で酔ったのか。有り得ないと言えないのが恥ずかしいところだ。体調が優れない時は特に。

「明日、卒業式だな」

と呟いた善樹に、歩は首を左右に振る。

「花火大会だよ……」

「いや、卒業式」

瞼が重くなってきたが、善樹がいるのに寝るわけにもいかない。普通ならここで無理矢理にでも、眠気を退けられるはずなのに、今回はそうはならなかった。

目を閉じそうになったところで、善樹に軽く肩を掴まれる。けれども、薄く目を開けるのが精一杯だった。

「おい、薬。薬、飲めよ。相変わらず、弱っちいんだから」

「……ああ」

返事はしながら、行動に移せない。仕様がねえなあ、と呟きながら善樹がコップに水を入れて持ってきてくれた。

歩はかなりの気力を振り絞って、何とか薬を飲み下す。

「明日、タイムカプセル、見付けに行こう。俺、後から行くから」  
「分かった……」

半分寝ながら返した歩。善樹は慌てるそぶりも見せずに、呟いた。

「卒業、出来るといいな」

だから、卒業式じゃないって……と言う歩の思いは、結局、声にならなかった。

花火大会は夕方近くになってから始まる。けれども、午後一時ころから、各部活動の屋台が始めるので、気分は学園祭だ。

それは夕威にしても裕子にしても例外ではない。善哉だけが我関せずの状態だ。

だから、今、歩と二人で資料室にいる。

「善哉はいかないのか、売店とか」

「俺は別に……腹減ってないし」

つまらなそうに本を眺めながら、半まどろみながら、善哉は歩に返す。

その素っ気なさに微笑んで、歩は本のページを捲る。

「あんまり似てないな、君と善樹」

「そうっすか？」

「うん。善樹は…夕威みたいな感じだったから」

「うわ、ウゼ」

「そんな事を言うもんじゃない」

顔をしかめた善哉に苦笑を向けて、歩は、ああ、と、善哉に言う。

「そういえば、昨日、善樹が家に來たんだ。思ったより元気そうだよかったよ」

「は？ 兄貴が？」

「そう。病院にいたって言うんだけど……どこか悪いの？」

「……あの」

と、善哉が口を開きかけたタイミングで、夕威が雪崩のごとく、資料室に駆けてきた。

「たこ焼きとお好み焼き、どっちがいい！！」

「何だよ……」

「フランクフルトと焼き鳥だったらどっち！？」

「夕威、少し落ち着いたらどうだい」

「死活問題なんだ！ アイスとかき氷、取るならどっちにする？」

なんだかんだで、下げている袋と手に、その全てを持っている気がしたが、善哉は深く溜め息をついてから答えた。

「たこ焼き焼き鳥塩アイス」

「じゃあ半分あげる！」

「……焼き鳥、塩じゃないなら、いらないから」

無理矢理渡された善哉は、焼き鳥だけ突き返して、たこ焼きとアイスを受け取る。歩も、いらないと云ったのに、善哉が受け取らな

かった焼き鳥を渡された。

「一応、飲食禁止なんだけど…」

「いいっていいって！ ばれないばれない」

「先生、校則違反ですー」

「お前もだろ！」

アイスを食べながら言う善哉にも、惜し気もなく校則を破る夕威にも困ったものだが、それを許容してしまう自分にも問題がある。

「笑ってないで注意した方がいいですよ、先生。…うちらだけは例外で」

「裕子、ナイスー！」

「ははっ」

裕子も裕子で、綿飴片手にやって来た。

「はい。先生に渡してって」

「どうも……えっと、綿飴って何部だっけ」

「手芸部。モテるね、先生」

綿飴は甘いし、直ぐに溶けるから食べやすい。少しずつ口に含んで溶かしながら、歩はいつもの三人を見つめていた。

自分でもいい加減、呆れてしまう。未練がましく過去にしがみ付くようにして、羨ましく思ってしまう。

生徒達が楽しんでいる今を、歩達は永遠に逃してしまっていた。一緒に楽しく過ごす時間が、こんなに大切ななんて。

『しょーらいはカメンライダーになる』

『役者さん？』



『いや、カメンライダー』

『無理だって…』

『じゃあね、わたし、動物屋さん』

『僕：どうしようかなあ』

と言う会話を、病室でしていた。学校にいるか、病院にいるかし  
かしていなかった気がする。

思えば、酷い小学校時代だったけれども、あの時は、そんなことは  
考えなかった。善樹がいて、幸ちゃんがいて、なんだか色々な話を  
をしているだけで良かった。

それだけで、良かったのに。

」

「すみません、今日は遅れて行きますので……」

そう言って、母親が玄関先の電話を切った。学校へ電話したんだろ。

「ランドセルは？ 忘れ物、無い？」  
「無い」

手紙と小さな石ころの入った封筒が確り入っているのを確認して、歩は鞆の蓋を閉めた。

遅刻しては行けど、今日は卒業式だ。タイムカプセルの中身は忘れてはいけない。

「シートベルトしてね」  
「分かってるよー」

学校へ遅刻するのと、行きたくもない病院へ行かなければならぬ。苛立ちが、母親への態度を邪険なものにする。しかし、彼女は気にした様子もなく車を発進させた。

大通りに出て暫くしてから、母親が話を切り出す。

「聞いたわよ。幸ちゃん、転校しちゃうんですってね」

その言葉が、胸に刺さった。転校。六年生で、もう少しで卒業すると言ったときの転校だ。

当事者の幸ちゃんも、喜樹も歩も、ショックを受けたし、嫌だった。けれど、現実を変えることは出来ない。

だから、今日、卒業式をするのだ。

幸ちゃんの転校の事も、歩は病院へ行っていたせいで、他のクラスメイトより、知るのが遅くなった。こんなものしか用意できなかったけど、と思いながら入れたのが、いつか拾った綺麗な小石だ。

「はい、着いたわよ。降りて降りて」

「うん……わっ！」

「ちよつと、大丈夫!？」

「う、うん」

車から降りるとき、足を引つ掛けた歩は、地面に膝をついてしまった。大丈夫だと言いながらも、膝からは血が出ている。

慌てた母親に病院へ担ぎこまれながら、歩は意外に冷静だった。

「気を付けなきゃ駄目だよ、歩くん」

「はい」

只の消毒だけでなく、何度も薬をつけたり拭いたりされながら、足には漸く包帯が巻かれるところだった。

歩は、免疫力が極めて弱い子供なのだ。生活に支障は無いが、怪我や風邪にはめっぽう弱い。

定期的に病院で検査を受けて、異常が無いかを確認しながら生活をしてないと、知らぬ間に手遅れになっている可能性すらあるという。当時の歩には、事の重大さが、あまり理解出来なかったが。

「怪我の方は大丈夫ですね。体にも異常はありませんでした」

「そうですか…」

来るたびに同じことを言われ、母親も同じ様にほっと息を漏らす。歩にとっては不思議だった。

それほど危ないのだとも分かっていないから。

「はー、良かった！ 歩、晩御飯、何がいい？」

「んー。ハンバーグがいい。チーズのつてるの」

「じゃあ、お母さん、頑張るからね！」

「うん！」

そうして、学校の前で下ろして貰って、手を降って別れた後。教室に行ってみると、誰もいなくて、机の上に紙が乗っていた。

『さきにいつてる』

後半、少しよれよれになっている文字は、喜樹が書いたものだ。歩の到着が遅いので、先に校庭の隅の木所に行ってしまったんだろう。

封筒を持って急いで走っていたら、膝が痛くなってきた。少しイライラとしながら、ちょこちょこ歩いて、校庭に出る。

その時、裏門から入ってきた人を見た。

何か持つてる。普通に近所のお兄さん、みたいな人だった。けど、手には普通、持って歩かない物を持つてる。

少し校庭を見回して、木下に集まったクラスメイト達を見つけた様だった。そこからの展開は速い。

歩きながら走るようにして、スタスタと近寄ったかと思うと、手当たり次第に手に持ったもので切りつける。

「わ、あつー！」

真っ赤なものが。校庭が変な色に変わる。

動けなくなつた僕の目の前で、幸ちゃんがびくりにした顔のまま、僕と喜樹の掘った穴に落ちた。持ってたのは、カプセル。

そう、幸ちゃんが落ちたのに、そのお兄さんは、積み上がった土を穴に蹴り入れる。足なのに、物凄い量の土が、ざらざらと流れていく。

その人の足を蹴り飛ばし、体当たりをした喜樹。けど、直ぐに突き飛ばされて、お腹のどこかを、刺されて。

先生。先生……！！

呪文みたいに唱えても、先生は来てくれない。そして、全部が終わってしまった後に、漸く、漸く、保健室の先生がやって来て、先生達がやって来て。

「……」

ぼんやりとつつ立ったまま。歩は封筒を握り締めていた。

ドオン…バラバラ。

いきなり視界が明るくなったのに驚いて目を開けると、薄暗い資料室だった。明るさは、外の火花だ。

寝てしまったのか、とぼんやりと目を擦ると、何かが視界の端に移る。

キヤハハツという笑い声と走る足音が響き、歩は溜め息をつく。小学生だろう。花火を見に来た生徒の家族に違いない。

「あ、センス、起きた」  
「ホントだ」

パチン、と電気をつけられ、歩は目を細める。居たのは夕威と裕子だ。

「あれ…喜哉くんは」

寝惚けた頭で問うと、裕子が缶ジュースを歩に渡す。

「喜哉なら病院に行くって……お兄さんのとこだと思うけど」  
「……そう」

やっぱりどこか悪くしているのか、と思いながら、歩は受け取ったものをテーブルに置く。

「センス、大丈夫か」  
「え？」  
「スッゲー、疲れた顔してる」  
「ああ、大丈夫」

寝起きだから、と笑ってみるが、どこか釈然としないものがある。時計を見ると、八時を過ぎていた。花火大会は、八時半に終る。

「ぎりぎり。あ、先生、今晚和」

「うん」

走ってきたのか、少し汗をかいている喜哉に、夕威がジューズを放った。炭酸だ。

「……先生、まだ半分寝てないか」  
「さっき起きたところ……だと思っ」

こそこそと言う裕子に話しかけた喜哉。それを聞きながら、歩はぼんやりとしていた。眠気が中々覚めない。

「良い時間だな……これ、最後かな」

窓辺に三人集まって、一番大きな花火を上がるのを見つめている。あれが上がったら、今日の学校は終りだな、と思いながら、生徒達の後ろに立った歩。

笛のような高い音が空に上がって、それから、弾けた。弾けた瞬間、歩は視線を落としていた。

木の下に、誰かが立っていた。

ろく

花火が散って、光が消えて、辺りが暗くなる。

「……え」

そう言ったのは夕威だ。何に驚いているのか分からない様子で、歩や喜哉、裕子が彼を向く。

夕威自身はとても困惑しているようだ。月明かりの下でも分かる。

「え、な、なあ、電気……電気、点けたよな？」

そうだ。電気。

「ホントね……誰か消したのかしら」

と近くにあったボタンを押しても、何も反応しない。停電だろうか、と窓の外を見てみると、真っ暗だ。

「停電じゃね」

と、喜哉が振り返ると、夕威の顔が真っ青だ。いつもふざけた様になっている姿しか見ないので、驚きの具合いも違う。

「おい……大丈夫か？」

「だ、駄目、俺っ、駄目なんだよ、こっぴつーの！」

「夕威？ 何が駄目なの」

耳を塞ぐようにしてしゃがみこんだ夕威に、裕子が歩み寄る。



具合いでも悪いのだろうか、歩と喜哉も心配そうに見守るなか、夕威は震える声で訴えた。

「停電じゃない、これ、絶対停電じゃない。つかおかしいじゃん、誰もいないとか……見た？ 校庭さ、誰もいないし。何もないし！」  
「落ち着いて、夕威」

夕威の言葉に、校庭を見に窓辺に行った裕子の代わりに、歩が夕威の背中をさする。  
相当怖いのだろう。顔色もそうだが、体のが酷く冷たくなっている。

「うそ……」

口に手を当てて、後退さった先でぶつかった椅子に、裕子は尻餅をつくように座り込む。

喜哉はジッと窓の外を見て、うろたえる様子もなく振り返った。

「どうする？」

「どうするって……」

「俺も分かんねえけど。ここに居たって、どうもなんねえだろ」

冷静な喜哉に、裕子も夕威も反応を返せない。ただ歩には心あたりがある。

「……懐中電灯、探してくる。確か職員室にあったはずだから」

立ち上がった歩に着いて行こうとした喜哉だが、その足を夕威に掴まれて止まる。

少し眉を寄せて彼をみやると、夕威は一層、手に力を込めた。

「喜哉は、駄目だ」  
「はぁ？」

苛立たしげに喜哉が言った瞬間、資料室の戸が、静かに閉められた。

本当に真っ暗だった。壁に手を当てながら何とか階段を降りきった歩は、職員室の戸に、指を這わせる。取っ手を見付けて、いざ開こうとした時だ。

戸が勝手に開いた。

え、と、戸から手を離すと向こう側驚いたのが、声こそ出さずに、何かを落とした。

「あ、あの…」

無言でいるのもどうかと思い、声をかけると、相手は意外や意外、知り合いだった。

「あ、歩先生？」  
「杉元先生、ですか」  
「ええ」

落としてしまった懐中電灯を拾いあげた彼女は、それをつけて歩  
に向ける。向けられた歩は、目を細めて少し笑う。

「よかった…他に先生がいて。あ、懐中電灯はまだありますか」

「ええ、後、三つ」

杉元に連れられ、懐中電灯を二つ手にした歩に、彼女は首を捻る。

「一つで十分ではない？」

「いえ、上に生徒が…」

「まあ」

驚いた様子の杉元。だが、彼女が驚いたのは、生徒が上にいると  
言うことについてで、今、起こっている怪現象についてではない。  
そしてそれは歩も同じだ。

「今晚和ー、お二人さん」

「善樹」

軽い調子で職員室に入ってきたのは、後から行くと言っていた善  
樹。彼は懐中電灯の光を見てここまで来たらしい。

「歩、行こうぜ。タイムカプセル、掘りに」

「ああ。…杉元先生」

真剣な眼差しで背を向け、廊下に出ていった善樹を追い掛けるよ  
うに、数歩進んだ歩が、気付いたように引き返す。  
そして懐中電灯を杉元に渡した。

「三階の資料室に、皆いると思いますから。お願いします」

声はなく頷いた杉元に礼をして、歩は今度こそ善樹を追い掛けた。

資料室では、相変わらず縮こまっている夕威に、善哉が苛々している。裕子は何かを考えているようだが、混乱して考えがまとまらずにいるようだ。

「夕威」

「……」

もう何度目か。歩が行ってから何度声をかけても、うつ向いた夕威は答えない。

もう嫌だ、という苛立ちを吐き出すような溜め息を、善哉がついた瞬間だ。

コンコン、と扉を叩く音がして、三人が顔を上げる。一番扉に近いのは善哉だが、何と無く、開けたくなかった。

「開けないで、マジで」

絞り出すような夕威の声に、怪訝そうな表情で善哉が振りかえる。

「先生なら、ノックしない」

言っている間にも、もう一度ノックがあった。待つ限り、ノックが続く。

「も、もしかしたら、別の人かも。ほら先生に言われて来た人とか」

そう言つて、走るように扉に近付いて、取っ手に手をかけた裕子。瞬間、善哉の耳にクスクスという小さな声が聞え、夕威はずっと聞こえていた笑い声が、すぐ耳もとでした。

夕威と善哉の声が重なる。

「開けるな！」

「え？」

がらりと開いた扉の向こうは、ただ真っ暗だった。

「え、ちょっと……開けるなつて？」

「いや」

気のせいかな、と頭を掻いた善哉と裕子の間を、フラッと夕威が通る。

おい、と伸ばした善哉の手は、スルリと避けられてしまった。

さらに追い掛けようと裕子が教室から出た時、夕威が行ったのは別の方向から、懐中電灯の光がさした。

「あら、裕子ちゃん？」

「オバアチャン先生！」

「善哉くんも……ああ、善哉くん」

「え」

次に言われた言葉に、善哉は眉を潜めた。

「善樹くん、今年も来てるわよ。はい、懐中電灯」

「どうも。えっと、兄貴が……？」

「毎年だけどね、来てくれてるわよ花火大会」

笑顔で言う彼女に、善哉と裕子の表情がおかしなものになる。

「善哉のお兄さんって……」

「ああ、俺の兄貴は」

どうしたの？ と言った表情の杉元。善哉の口から事実を聞いた瞬間、彼女の顔色は真っ青になった

なな

「おい、死にそうじゃねえか、歩」

「大袈裟だな…少し疲れてるだけだよ」

玄関にたどり着いた所で、急に座り込んだ歩に、善樹が言う。

「薬、飲んだか」

首を左右に振った彼に、善樹は深く溜め息をついた。

「飲めよ。今からでも……ほら、立て」

「持ってきてない」

「じゃあ水だけでも飲んどけ」

校舎内に戻るより、外にある水のみ場の方が近いと、善樹は歩に肩を貸してそこまで歩かせる。蛇口を捻ってやって、ほら、と近付けた。

少々不服そうだが、歩は水を口に含み、むせた。

「おい」

「気管に入ったんだよ…げほっ」

最後に口をゆすぐと、そのまましゃがみこむ。

「休ませてくれ。調子が悪いみたいだ」

「はいはい」

昼間に居眠りしてしまった辺りから、分かっていた。今日は、と

言うより、昨日から体の調子は思わしくない。  
ふう、と息をついてから、歩は立ち上がる。

「もういいのか？」

「ああ。大丈夫」

良くなさそうだ、と思いながらも、善樹は肩を貸す。フラフラと  
目的の木のもとへ行くと、そこには先客が。

「夕威？」

無心でザクザク、ザクザクと土を掘っているのは夕威だった。自  
分に土が降ってくるのも構わずに、豪快に掘っている。

「お前ら…そいつから離れるよ！」

「善樹？」

がし、と夕威の肩を掴んだ善樹に驚いた歩だったが、次の瞬間、  
更に驚いた。

「今年は邪魔、させない」

「うっ!？」

夕威が善樹の手を掴み返した瞬間、支えが無くなって歩が土の上  
に膝をつく。善樹が。善樹が、消えた。

「……」

暫く呆然としていた歩は、立ち上がって、穴を掘続ける夕威の手  
を止めさせる。



何がなんだかは分からない。分からないが、ただ嫌だった。自分以外の誰かが掘っているのが、嫌だった。

「遅いよ、センス」

「夕……ぐっ!!」

笑って振り返った夕威にほととしたのも束の間。歩は強い衝撃に土埃をあげて地面に倒れていた。痛みは遅れてやってくる。

「遅いよ……痛かったんだよ、センス」

スコップか。そう思ったのは、三発目をくらった後だった。

「怖くてね、ずっと呼んでたの……来てくれなかったよ、センスは」  
何度も何度も殴られながら、歩は思う。僕だって、そうだったさと。

けども口を開く気力はない。

「何やってんだ、夕威!!」

校舎一階の窓から飛び出してきた善哉が、夕威にとびかかる。押し倒された夕威は。

「善樹……」

そう、言った。しかし、善哉は怒鳴りかえす。

「兄貴は病院だ! 居る別けねえだろ!!」

「びょう、いん？」

裕子と杉元に助けられ、何とか体を起こした歩に、裕子が言う。

「善哉のお兄さん、植物人間、なんだって」  
「え」

植物人間。いや、だって会ったじゃないか。昨日も今日も。そう思っ  
て杉元を見ると、彼女は、頷いた。

「彼は毎年来ていたわ。ここに。無差別殺人事件があった日に」  
「……そうか」

ふと浮かんできたのは、孤独感。だが、歩は顔をあげて、よろよろ  
と、善哉も夕威も無視して、中途半端に掘られた穴を覗き込んで、  
言った。

「皆、分かんないかな…僕だよ」  
「先生？」

歩に近付こうとする裕子に、杉元が止めるように首を左右にふる。  
急に静かになった夕威を不思議に思いながら、善哉も顔をそちらに  
向けた。

その目が、見開かれる。

「……歩くん？」  
「うん」

穴を挟んで向こう側。小さな箱を抱えた女の子が立っていた。

「僕だよ」

そう言うと、どこからともなく、ワラワラと少年少女が集まってきた。口々に、『歩だ』とか『遅刻だよ』なんていいながら。

「ごめんね、凄い遅刻だね」

「先に行こうとしてたの止めの、大変だったんだぜ…痛つてえ」

手首を振って戻ってきた喜樹に、向こう側から『そうだったんだ』『ごめーん』なんていう声上がる。

「兄貴」

「おお、さっきぶり、喜哉」

夕威から離れて、歩いてきた喜哉が、喜樹の腕に触れようと手を伸ばす。しかし、それは当然の様に叶わなかった。

歩は、目を細めて、自分の手をみる。そして、自分が喜樹に触れた理由を考えた。

「どんまいだな。お前は長生きするぞ」

そう言って、多分頭を撫でようとしたんだろう。手をあげて、そこで止まる。やるせなく苦笑したかと思うと、喜樹は、穴を飛び越して、幸ちゃん達のいる方へと移った。

「俺はこっち側だ。どうするよ、歩」

「僕は…」

「歩くん」

悩んでいる歩に、幸ちゃんが小さな掌を伸ばす。笑顔の幸ちゃん

と、ただどうするかを見ているだけの喜樹。  
歩が手を伸ばそうとした時だ。

「せ、センセー！！ 駄目！ うわっ」  
「夕威！」

いきなり起き上がり、歩を止めようと走り出した夕威が、体勢を崩して倒れこむ。逆に手を伸ばして、夕威を受け止めた歩に、幸ちゃんの手を引っ込めた。

喜樹は小さく笑う。

「分かってるじゃないか、お前。…喜哉」  
「何だよ」

「母さん達に言ってくれよ。訳分かんない管とかさ、外してくれって」

「…自分で言え」  
「すねるなよ。言えねえから頼んでるんだ。頼むよ」  
「……」

うん、と言えるわけがない。これは殺してくれと言っているのと同じだ。

けど、歩は止めない。むしろ逆だ。外してやってくれと言っただろ。

「…歩もな。もうちょいだけ待ってやるよ」  
「うん。これ」

微妙な顔で笑った喜樹。頷いた歩は、幸ちゃんに白い封筒を渡す。それを受けとる為に伸ばされた手は、封筒を握めぬまま消えて、同

時に世界は明るさを取り戻す。

急に力が抜けた歩は、そのまま流れに任せて目を閉じる。

しわの刻まれた封筒は、小さな亡骸と箱の上に落ちて、ただじつと、沈むように鎮座していた。

はち

夏休みの中頃。資料室で休んでいるのは、生徒二人と教師一人。

「はあ…ねえ、センス。保健室戻らなくていいの」

「今日は誰もいないわよ。あなた達以外」

そうなんだ…と呟いた夕威には、いつもの元気はない。原因は歩にある。

「おはようさーん…って、あれ、杉元先生」

「おはようございます。どうだったの、お兄さんは」

「ああ、なんだかんだで、維持装置外してきました」

親はやっぱり嫌だったみたいでしたけど、と喜哉は椅子に座る。  
さわさわと言う木の囁き。

木の根本に、もう穴はない。タイムカプセルもなければ、小さな  
女の子の遺体もない。

「あの後、大変だったわよね。先生は倒れちゃうし」  
「……」

曇った夕威の表情に、裕子が、あつと言葉を詰まらせる。そして  
喜哉が溜め息をついた。

「お前のせいじゃねえって言ってただろ。先生が言ってんだから気  
にするなよ」

「…だけどさ、殴ったのは俺だし」

「お前じゃなかった」

抑えた時の、あの冷たさも、感じた雰囲気も。

「お前なもんか」

視線を下へそらした喜哉。

「先生がさ、親父とお袋に言ってくれたんだよ。兄貴の事。…皆で楽しくやりますから、だつてさ」

「皆で楽しくやりますって…」

引っ掛かるもの言いに、喜哉と裕子は眉を寄せる。それに答えたのは夕威だ。

「夏が終わる前に、センセの寿命は無くなるんだ」

「…は？」

それつきり口をつぐんだ夕威を引き継ぐように、杉元が言う。

「もとから体の弱い子だったのよ。その頃から、長生きは出来ないのどつて言つ話でね」

正直、こうしてまた会えるとは思つてもみなかつたそうだ。

「十何年も前にあつた、無差別殺人事件の目撃者が歩先生だったのね。でも、体が弱い子だから、びっくりしちゃって、体調くずしちゃつて」

入院してしまつたそうだ。一時は昏睡状態にすらなるほどに。そして逃げていった犯人は、そのまま逃げきつたとか。

「それからよ。毎年その日になると、学校から誰もいなくなるの」  
「初めてじゃなかったんですか」

驚いているのは喜哉と裕子。夕威は目を細めているだけだ。

「俺、知ってた。だから、毎年休んでたんだ」

「じゃあ、今年は何で…」

「センセが、いたから。死にそうだなって思って。俺、結構センセの事、好きだったし」

そうね、と頷いた杉元は言う。

「体は弱い子だったの。でもね、皆、彼のが好きだったわ。取り分け、喜樹さんと幸ちゃんね。一緒に遊んでたわ」  
「……」

小さく溜め息をついた喜哉に、慌てた様子で杉元が言う。

「ごめんなさいね、こんな話」

「いや、いいんですけどね」

どれだけ、仲が良かったのかを考えた。死ぬことに恐れを感じない程、仲が良いとはどういう感じなのだろうと。

「先生の体、そこまで悪かったなんて…ねえ」  
「ああ」

花火大会のあと、大騒ぎになった場所が二つある。一つは当然、あの木の下。もう一つは、外の水のみ場だ。血まみれだったそうで。



「本当は入院してなくちゃいけなかったのよ。でもね、歩先生は、もう駄目ですから学校に行きますって。我が儘言う小学生じゃないでしょうって、言い返したんだけど」

僕、小学生の時に我が儘言わなかったの。と、更に返されてしまったという。

「センセはずっと小学生だったんだよ。センセには過去と今しかなかった」

「どういうことだよ」

「喜哉のお兄さんも一緒だよ。…僕らと違った」

首を捻る喜哉に、夕威は目を伏せて言った。

「未来に何もなかったんだよ。センセ達には」

歩には生きる時間じたいがなくて、喜樹には何も出来ない時間が永遠に続くだけ。

「昔より楽しいことがないから、生きようとも思えない……センセ、ちよつと嬉しそうだったし」

病院に三人揃ってお見舞いに行ったとき。警察の人に返してもらったというタイムカプセルを傍らに置いて、歩は笑った。

疲れた感じはなくて、普通ならこう笑うだろう、という顔で。

「ああ、なんか、今日行ったら、車椅子だった。歩くの大変だからつてさ」

「……」

でも、やっぱり笑っていた。本当にただの笑顔だった。達成感があるような、漸くゴールにたどり着ける、と言うような。

喜哉達にとっては、ただ切なさだけが残る笑顔で。

「……これでいいのかなあ」

呟いた裕子に答えたのは、夕威だった。妙に自信があるようではっきりと。

「いいんだよ。センセは寿命まで生きるんだから」

あそこで女の子の手を取っていたら、そこで死んでしまっていたという。

「いいんだろうな、先生はさ」

呟いた喜哉はぼんやりと、あの木の下を眺めていた。

個室の部屋で、歩は古びた缶箱の蓋を開けた。

「開けちまうのか」

「…開けるだけ。中は見ない」

「開ける意味ないだろ」

音もなく入ってきて、椅子に腰かけた喜樹に、歩は笑ったまま、缶の中に手紙を放り込んだ。

「まだ入れてなかったのか」

「うん…それで、どうなったの」

「……どうって、お前。そろそろあのベッドともおさらばだな。喜哉のヤツ、薄情なんだぜ？ さっさと学校いきやがって」

「見たくないんだよ。きつとね。毎日、来てくれてたんだろ」

缶の蓋を閉めて、ボードの上に置いてから、喜樹を向く。

喜樹は自慢気に頷いた。

「ああ。学校の事、話してくれんだ。毎日毎日。楽しそうだったけど…俺には出来ない事だったからな。話より、アイツが来てくれるっ通のが嬉しかったな。親父達は俺のせいで働きっぱだったし」

申し訳なかったな。と苦笑した喜樹を歩が小突いた。

「生かしてもらってたんだ。申し訳なかった、は違う」

「そうだな」

嬉しそうにする喜樹が、不意に胸を抑える。曇った表情に、歩もああ、と悟る。

「苦しいな、やっぱり」

「……だろうな。死ぬんだから」

「はは、直球過ぎだ」

小さく笑う喜樹が、歩に手を伸ばす。その手は歩の腕に、なんなく触れた。

「僕だつて直ぐにいくんだ。触れたつて不思議じゃない」

「先に行つてる…早くこいよ」

「普通は逆のことを言うんだけどな」

「へへ」

と、痩せ我慢の様に笑ったのが最後。瞬きをした瞬間に、喜樹はいなくなっていた。

「……先に行つてる、か」

呟いた歩は、ぼんやりと窓の外をみる。蒼い空だ。

そうしながら思った。

この空が朱になって、もう車椅子なんかにも乗らなくなった頃、今みたいに疲れて眠ってしまった後。

皆でこのタイムカプセルを開けるんだ。

箱の中にしまった、大事な大事な、僕らの未来を。

大きく息を吸って、目を閉じる。近い内に来るだろう、その時を待ち愛しく思うのは間違っているのだろうか。

「……」

目を閉じた歩を起こそうとする者はいなく、ただ、風が彼を撫でるだけだった。

ゆっくりとゆっくりと、深く眠ってしまったのを誘うように。

.

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8126e/>

---

夏の卒業式

2010年12月3日14時19分発行